

大学図書館における人文科学分野の研究者を対象とした  
情報サービスの可能性

Possibility of Effective Information Services for  
Humanities Scholars at University Libraries

新 倉 利 江 子  
*Rieko Niikura*

*Résumé*

The purpose of this paper is to clarify whether it is possible to offer information services in the humanities or not, and what kind of services should be offered, based on the information needs and uses of scholars in the humanities.

To pursue this purpose, a review of previous studies in this field is made, from which the hypothesis about the information needs and uses of humanities scholars is derived. To test this hypothesis, 7 humanities scholars at Keio University are interviewed. The results of interviews prove the hypothesis is right for the most part. And it is found as follows that:

- 1) There is only a small need for and use of information services because of some factors which obstruct the use of those services
- 2) If the obstructions are removed, the need for and use of information services should increase
- 3) Two types of information need are identified: "basic information" and "considerably specialized information"
- 4) The need for and use of information services depends on the type of information need

From the above, it is concluded that in order to offer effective information services in the humanities, it would be necessary:

- 1) to remove factors which obstruct the use of services
- 2) to distinguish between the two types of information need
- 3) to try to understand what kind of data each scholar needs, especially in cases where they need "considerably specialized information".

---

新倉利江子：慶應義塾大学研究・教育情報センター，東京都港区三田 2-15-45

Rieko Niikura: Library and Information Center, Keio University, 2-15-45, Mita, Minato-ku, Tokyo.

1990年4月4日受付

- I. 人文科学分野における大学図書館の情報サービスの現状
  - A. 人文科学の定義
  - B. 大学図書館の情報サービスの現状
- II. 人文科学分野の研究者の情報要求と利用
  - A. 情報要求・利用の特徴
  - B. 人文科学分野の研究者の情報要求・利用の仮説
- III. 人文科学分野の研究者の情報要求・利用に関する調査
  - A. 調査目的
  - B. 調査方法
  - C. 調査結果
- IV. 人文科学分野の研究者に対する情報サービスの可能性

## I. 人文科学分野における大学図書館の情報サービスの現状

### A. 人文科学の定義

人文科学分野の研究者を対象とした既存の調査では、それぞれ人文科学の範囲が非常に異なっている。このことについて岡澤は次のように述べている。

人文科学というあいまいな標目のもとに実に多くの分野が含まれている。社会科学との境界線もあいまいで、ある分野は人文科学に分類されたり社会科学に分類されたりする。人文科学に何を含めるかは国や大学によっても異なる<sup>1)</sup>。

この文章からわかる問題点の一つは、社会科学としてもとらえられる分野を人文科学に含めるべきかどうかということである。もう一つは、国や大学によって人文科学の範囲が異なることが、図書館における人文科学の範囲をもさまざまなものにしていると考えられることである。人文科学分野でのサービスを考える際、図書館では何を人文科学としているかを考慮しなければならない。そこで、図書館によってまちまちだと思われる人文科学の範囲を、どのように扱うかが問題となる。ここでは、少なくとも上記二点の問題について本稿のとした立場を明らかにしたいと思い、次のように定義した。

- 1) 学問を三つ(自然科学・社会科学・人文科学)に分類したときの人文科学。すなわち、一般的に自然科学や社会科学に入るとされるもの(たとえば物理学や経済学)は対象外とし、人文科学に必ず含まれるもの(たとえば哲学や文学)は対象とする。

さらに、

- 2) 一般的に、大学の中で人文科学として位置付けられている分野。たとえば、ほとんどの大学で文学部に置かれている専攻など

も範囲とする。ただし、

- 3) 研究方法が自然科学や社会科学で採られているものと似通った分野(たとえば心理学や社会学)は除外する。研究方法は、研究者の情報要求や利用に影響すると考えられ、範囲に入れると結果の精度が損なわれる可能性があるからである。

こうしたことを考え合わせ、本稿における人文科学としては、哲学・文学・美術・音楽・歴史・言語学・宗教学を範囲とすることにした。

### B. 大学図書館の情報サービスの現状

#### 1. 情報サービスの定義と内容

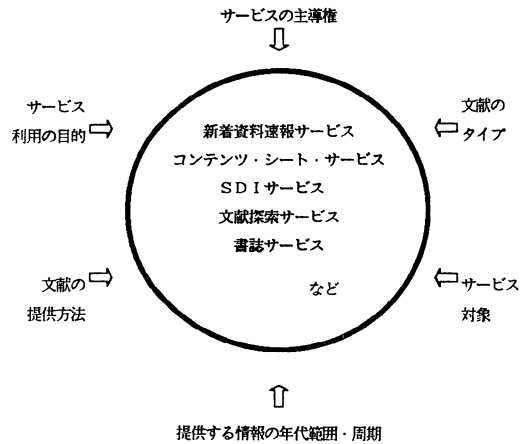
図書館・情報学でいう情報サービスは、“図書館・情報サービス機関において、情報を求めているその利用者に図書館が提供する人的援助”<sup>2)</sup>と定義される。具体的なサービスとしては、

- 1) コンテンツ・サービス、新着リストの配布、SDIなどのカレント・アウェアネス・サービス
- 2) 遡及検索サービス
- 3) 書誌サービス
- 4) 案内・紹介サービス
- 5) その他のサービス(翻訳サービスなど)

がある<sup>3)</sup>。A. I. Mikhailov らは、これらの情報サービスのうち、特に 1)~3) のような文献情報提供サービスを次の六つの観点によって分類している<sup>3)</sup>。

- 1) サービスの主導権による分類:

- 図書館側が強制的に行うサービス
  - サービスを必要とする人の要求によるサービス
- 2) 文献のタイプによる分類:
    - 出版物および (または) そのコピーのサービス
    - 非出版物 (たとえばテクニカル・レポート) のサービス
  - 3) サービスの対象による分類:
    - 情報出版物 (多数向け)
    - SDI (個人向け)
  - 4) 周期的か, 特定年代かによる分類:
    - カレント・アウェアネス
    - 文献や情報の遡及的探索
  - 5) 利用者への学術文献の配布方法による分類:
    - 利用者への文献またはコピーの直接伝達
    - 二段階サービス (最初は主題索引的出版物を配布し, 次にそれを見て利用者が興味をもった文献のコピーを配布するサービス)
  - 6) 目的による分類:
    - より多くの知識を与えるためのサービス
    - 実際的な利用 (情報の問い合わせに対する回答) のためのサービス



第1図 文献情報提供サービスの諸要素とサービスの種類

はっきり区別することができない。しかも、研究に関する情報要求は、自然科学の場合に比べて特定化することが難しい。こういったことが、人文科学分野へのサービスの発展を妨げる主要な原因となった。

以上のような背景から、自然科学分野ではきめ細かい情報サービスが行われる一方で、人文科学分野の図書館、特に大学図書館は“ほとんどの大学はカレント・アウェアネスや SDI サービスを提供していない”<sup>6)</sup>といわれるように、情報サービスの提供に関してかなり消極的である。

それでも、人文科学分野に対する情報サービスが全くないわけではない。たとえば、最近のコンピュータ技術の発達にともない、オンライン情報検索サービスが人文科学分野においても行われるようになった。その他、筑波大学のように、コンテンツ・シート・サービスや新着雑誌文献複写サービス (コンテンツ・シートにより配布したコンテンツを利用者が通覧し、それで必要とされた文献を図書館が複写して利用者の手元に届けるサービス) を全学的に行っている例もある<sup>7)</sup>。ただし、こうしたサービスは、自然科学分野で展開されてきたサービスを人文科学分野にまで広げているに過ぎないと考えられる。

このような現状については、二つの疑問点が指摘できるように思う。一つは、人文科学分野で情報サービスに対する要求が出てこないからといってサービスを行わないのは、潜在的な要求を無視する危険があるのではないかと、という点である。そしてもう一つは、自然科学分野

Mikhailov らはこれらを分類として挙げているが、逆に、第1図に示すようにこれらの組み合わせによって各種のサービスが行われているともいえる。本稿では、情報サービスの中でも、特にこのような文献情報提供サービスを中心に扱っていこうと思う。

## 2. 大学図書館の情報サービスの現状

1 で示したような情報サービスは、自然科学分野で発達し、文科系の学問分野、とりわけ人文科学分野はサービス面で最も立ち遅れている。このような現状の背景については、長澤<sup>4)</sup>が論文の中で言及している。それを要約すると、次のようになる。

まず、自然科学分野は“近世以来、経験科学として確立され、さらに技術が著しく進展し、多量の文献が生産されるという、新しい事態に当面”<sup>4)</sup>した。その結果、“前近代的図書館は、そのままでは、もはや新しい図書館利用者に対しては充分機能しえなく”<sup>4)</sup>なり、このことが、多彩なサービスの展開を促す原因となった。

一方、人文科学分野では、文献の保存庫としての役割を強調していた伝統的な図書館サービスによっても、ある程度の便宜を計ることができた。また、人文科学分野ではしばしば文献自体が研究対象となり、科学・技術の分野のように研究そのものと文献の収集・利用との間を

でのサービスが人文科学分野でも効果的であるとは限らないのではないか、という点である。従って、人文科学分野における情報サービスの問題を論じるには、まず潜在的なものを含めた、研究者の情報要求と利用について把握することから始めなければならない、と考える。

## II. 人文科学分野の研究者の情報要求と利用

本章では、まず人文科学分野の研究者の情報要求と利用の特徴を、先行研究の結果から洗い出していく。このことが人文科学分野の研究者に対する情報サービスを考える上で必要だということは、前章で述べたとおりである。そして、本章の後半では人文科学分野の研究者の情報要求・利用についての仮説の構築を試みる。

### A. 情報要求・利用の特徴

人文科学分野の研究者の情報要求と利用については、これまでにも様々な調査がなされている。それらの研究の結果に見られる、人文科学分野の研究者の情報要求・利用の特徴を、以下に列挙した。

- a. 研究の進め方
  - ・研究方法は多様である。
  - ・単独で研究する。
  - ・文献探索は委託しない。
- b. 使う資料
  - ・資料は多種多様である。
  - ・オリジナルな資料を求める。
  - ・雑誌よりも図書を使う。
  - ・雑誌も重要な資料である。
  - ・古い資料も価値がある。
  - ・新しい資料は重要ではない。
- c. 情報を入手する場所/経路
  - ・個人の蔵書に依存している。
  - ・図書館は重要な情報源である。
  - ・informal communication は未発達である。
- d. 資料の探し方
  - ・二次資料をあまり利用しない。
  - ・巻末の参考文献リストをよく使う。
  - ・ブラウジングは必要である。
- e. 図書館などが提供するサービスの利用
  - ・サービスの利用は少ない。
  - ・最新情報サービスの利用は少ない。
  - ・図書館間相互貸借サービス (Interlibrary loan, 以後 ILL と記す) は重要である。

- ・図書館員を信頼していない。
- ・図書館員との関係が密でない。

これらの項目に基づいて、先行研究の結果を表にまとめた (第1表)。

### B. 人文科学分野の研究者の情報要求・利用の仮説

情報要求とは本来それ自体個別に存在するものである。さらにまた、サービスに対する利用者の主観的判断に頼った分析では生産的な結論が出せない。なぜなら、利用者のサービスへの期待は、現行のサービスを利用し続けているうちに、そのサービスと同じか、それより少し上のレベルにおかれるようになると思われるからである<sup>20)</sup>。従って、より潜在的な要求を知ることが重要になる。そのため、要求に影響を与える要素、及び要素間の因果関係を明らかにすることが必要になると思われる。

本節では先の先行研究結果、及び人文科学研究の特徴や方法について論じた文献によって、こうした因果関係を含めた仮説の構築を試みる。

#### 1. 要求・利用からのアプローチ

先に挙げた人文科学分野の研究者の情報要求・利用の特徴から、図書館の利用に直接関係すると思われるもの、その中でも特に支持の多かったものを九項目選んだ。以下、各々についてその背景にある要因を検討していく。

##### a. 文献探索を他人に委託しない

これに関しては多くの研究でその理由が述べられている。そこで、代表的な見解を幾つか紹介することにする。

Sue Stone<sup>21)</sup>は、「人文科学分野の研究者は単独で研究を行う」ことの局面として、「文献探索を委託しない傾向がある」のだ、としている。その理由として、

- ① 自分達に代わって探索する人に対する信頼の欠如。
- ② 自分達の要求を他人に伝えることに問題がある。
- ③ 研究者にとって、探索自体が重要な作業。

といったことを挙げている。また、「人文科学分野の研究者は単独で研究する」ことについては、

- ① 個々人の見解は、知識への貢献全体の一部としてなお考えられる、という人文科学の本質の反映。
- ② ある調査の線に沿って適切な資料を収集し、組織化するいかなる方法が利用できようと、個々人の解釈が最も重要である、ということ。

などを理由として述べている。

また、Susan S. Guest<sup>25)</sup> は、Stone のレビューから

第1表 人文科学分野を対象とした先行研究

調査者 (発表年) 方法 対象分野	Jonesら <sup>9)</sup> (1972) 引用分析 史	Beboutら <sup>10)</sup> (1975) レビュ 人文科学	Stieg <sup>11)</sup> (1981) 質問紙 歴	CRUS <sup>12)</sup> (1981) 利用者研究 人文科学	Stone <sup>8)</sup> (1982) レビュ 人文科学	Stone <sup>13)</sup> (1985) レビュ 人文科学	Méndez <sup>14)</sup> (1984) 要求分析 人文科学	Guest <sup>15)</sup> (1987) 質問紙 人文科学	Hopkins <sup>16)</sup> (1988) 質問紙 文	文部省 <sup>17)</sup> (1971) 質問紙 人文科学	田中 <sup>18)</sup> (1977) 追跡調査 歴
a. 研究の進め方 研究方法は多様である 単独で研究する 文献探索は委託しない		○	△ <sup>3</sup> ○ ○	○ ○ ○	○ <sup>1</sup> ○ ○	○		△	○ ○		
b. 使う資料 資料は多種多様 オリジナルな資料を求める 雑誌より図書を使う 雑誌も重要な資料 古い資料も価値がある 新しい資料は重要ではない	○ ○ △ ○ ×	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	× <sup>2</sup> ○ ○ ○ ×	△ △ ×	○	○	
c. 情報入手する場所/経路 個人の蔵書に依存 図書館は重要な情報源 informal communication は未発達		○ ×	○ ○ ×	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○		○ ○ ×	○ ○ ○		×
d. 資料の探し方 二次資料をあまり利用しない 巻末の参考文献リストをよく使う 書評をよく使う ブラウジングは必要		△	△ ○ ○ ○	○ ○ ○	○ △ ○	○ ○ ○		○ ○ ○ ×	×	△	△ ○
e. 図書館などのサービスの利用 サービスの利用は少ない 最新情報サービスの利用は少ない ILLは重要 図書館員を信頼していない 図書館員との関係が密でない	○ ○		○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○		○	△ ○ ○	○

1: ○=左の見解を支持 2: ×=左の見解を不支持 3: △=左の見解を一部支持

つぎの見解を導いている。すなわち、人文科学分野の研究者にとって、一次資料に直接あたること、持続して相互作用し合うことは、アイデアを思い付くのになくてはならないことである。言いかえると、研究者はあらかじめ自分が探しているものを知ってはいないかもしれない、ということになる。その結果、探索を委託しようとし、ということである。Richard L. Hopkins<sup>16)</sup>も、文学研究者が探索を委託しながらない理由を研究の途中で偶然に発見する機会を失うからだ、としている。

では、人文科学分野の研究者は偶然による探索方法に依存しているのだろうか。

Stone<sup>9)</sup> はブラウジングの必要性を人文科学研究の特徴として述べている。それについて、研究者はあらかじめ何を探しているのか知っているとは限らないという見解を理由として挙げている。しかし、彼女自身は答えを出しておらず、

- ① 研究方法が洗練されていないため、間接的な情報源の利用が制限されているからなのか。
- ② 二次資料が不適切だからか。
- ③ 人文科学研究の問題の本質によるものなのか。

といった問題を提起している。しかしながら、他の研究でもブラウジングの必要性が支持されている訳ではない。

Margaret F. Stieg<sup>11)</sup> は、歴史研究者が既存の二次資料を利用しないことについて、次の点を理由として述べている。

- ① 存在を知っているのかもしれないが、努力して使おうとしない。
- ② 入手、利用できない。
- ③ そのようなものがあることさえ知らない。

関連して、Guest<sup>15)</sup> は書評の利用が高いことを指摘している。それについて彼女は、人文科学分野では研究資料を直接対比させることが必要であり、注釈や抄録よりも文脈をたどった情報の得られる書評は有用であるためだ、としている。そして、これは人文科学特有の研究方法から生ずることだ、と述べている。

田中<sup>10)</sup> は、一人の研究者の文献探索行動を追跡調査した。その結果、その研究者は引用文献から適及的に文献を探し出すという方法にかなり依存していた。この方法の利点を、田中は「個々の文献評価・選別が可能な点」であるとしている。その理由として、

- ① 引用されたこと自体、その文献が一定の水準にあるといえる。

- ② 引用の前後の文章の中に「目を通す」べきか否かを判断しうる「評価」の語句を伴う例が多い。

- ③ 評価の語句を欠くとしても、文脈の中では、研究者の永年培ってきた学識により推測の評価が可能である。

ことを挙げている。そして、既存の書誌が顧みられない決定的な理由は、書誌事項を羅列したのみの書誌では個々の文献の「評価」ができないことだ、としている。

- b. 用いる資料が多種多様

人文科学分野の研究者が使う資料の種類が多い、という指摘はかなりある。しかし、その理由に言及しているものはあまりない。Carole Smith<sup>12)</sup> は「歴史研究者の使う資料は深くて広い。特に社会文化史などの場合は、くつひもの長さから人間活動のすべてが研究対象となる。」<sup>12)</sup>と述べている。このことから、人文科学研究では資料が研究対象となるため、ありとあらゆるものが要求されるのだとすることができる。

- c. オリジナル（代用物を含む）を求める

言うまでもなく、オリジナルな資料は研究の対象として用いられる。Stone<sup>9)</sup> は、オリジナルな資料の必要性について次のように述べている。すなわち、最近書かれたものは新しい見解を提示するが、それでも尚、研究者はオリジナルな資料に戻りたがるというのである。彼女はその理由を、オリジナルからそれによってしか得られない情報を獲得するためである、としている。従って、ここにも個人の解釈を重視する傾向があると言える。

- d. 図書を雑誌より使う

図書を雑誌よりもよく利用するという見解は多い。しかしながら、それがなぜかということを明らかにしているものはあまりない。

Guest<sup>15)</sup> は、研究発表の媒体という観点から各々の資料形態のもつ役割を調査している。その結果、既に完了した研究については学会提出論文や雑誌論文で、ほぼ結果が出かかっているものについては図書や雑誌論文で発表する傾向があることが分かった、としている。従って、図書からは新しい情報が得られるのだとしている。

けれども、雑誌が重要な資料であることも又多くの調査で指摘されている。図書が重視されていることは間違いないさそうだが、だからといって雑誌が軽視されている訳ではない、という点に注意する必要がある。

- e. 古い資料も価値がある

「人文科学研究では、古い資料だからといって自然科学の場合のようにすたれたりしない」、「人文科学研究で

は新しいものにアクセスするより、遡及的に広い範囲の資料を調べるほうが重要」などといった見解がある。

Stone<sup>9)</sup> はその理由として以下の事柄を挙げている。

- ① 新しいものだけでは不十分である。もっと前のものにも権威がある。
- ② 新しいものが前のものにのりつたものであっても、過去のものは比較検討するために求められる。これはオリジナルな情報源に戻りたがるためである。
- ③ 時がたってから関心もたれる作品や時代がある。
- ④ 二次的研究はすたれるが、一次資料は価値が保たれる。

ただし、古いものが重視されるからといって、新しいものの重要性が直ちになくなるとは言い切れないようである。

#### f. サービスの利用は少ない

この項目は、「a. 文献探索を他人に委託しない」と関連している。そのため、重複する事柄はここでは述べない。

Stone<sup>9)</sup> は「自然科学やビジネスの分野に比べると、人文科学分野での情報サービスの利用は少ない」という研究結果をレビューの中で紹介している。その理由については、

- ① 人文科学分野の情報要求は自然科学分野のそれとは異なるため
  - ② 人文科学分野の情報サービスは自然科学分野のよく発達したものに比べて洗練されていないため
- の二つが考えられるがどちらかは分からない、としている。

また、文部省の調査では、人文科学が最も文献を多く用いるにもかかわらず、高度な情報サービスへの要求が他分野に比べて少ないという結果が出た。これについて桜井らは“人文科学系研究者の情報利用パターンは、情報そのものよりも図書ないし雑誌そのものへの要求が強い”<sup>18)</sup>という考察を行った。

田中<sup>19)</sup>は、図書館員の養成法が現状に停滞する限り、研究者の図書館認識は必要な文献の貸し出しを受けるところの域を出ないだろうと述べている。このことは、図書館員の能力が研究者の図書館認識、ひいてはサービスの利用に影響を与えることを示唆している。

その他、Aida Méndez<sup>14)</sup> は情報サービスを利用しない理由として、

- ① 自然科学の概念に沿ってデータベースが作られていること。
- ② 自分で探す、という習慣。
- ③ サービスが十分に知られていない、あるいは真価が認められていないということ。
- ④ 研究資金が乏しいのに対して高すぎる料金。

が考えられる、としている。

#### g. ILL は重要

ILL が研究者にとって重要であることについては、Clyve Jones<sup>9)</sup>、Stieg<sup>11)</sup>、Stone<sup>9)</sup>、及び Guest<sup>15)</sup> が「人文科学分野の研究者は広い範囲の資料を要求する」ためだとしている。また、Stone<sup>9)</sup> はさらに、「研究者は選んだ研究課題の追及に固執すること」も理由として挙げている。

#### h. 図書館員を信頼していない

Jones<sup>9)</sup> は、歴史研究者が図書館員の能力を信頼していないことを指摘し、それは現在の図書館から自分達が要求するサービスを受けていないと感じているためだとしている。

また、John Chapman は“教員と学生、教員と図書館、学生と図書館の間というこの相互理解の欠如は歴史研究者の利用パターンと深いかわりをもっている”<sup>12)</sup>と述べ、コミュニケーションのギャップが利用態度に影響を与えていることを示唆している。そして、研究者は図書館員の主題知識に不信を抱いているとしている。

Guest<sup>15)</sup> も主題専門員 (subject bibliographer) 側に常に接触しようという努力が欠けている点を指摘している。そしてそのことが、図書館員が提供できるサービスについて一般的に知られていないという状態を生んでいる、と述べている。

#### i. 図書館は重要な情報源

これまで述べてきたようにサービスへの要求や利用は少ないにもかかわらず、図書館は重要な存在だということが、多くの研究で示されている。その理由については Stone<sup>9)</sup> が、「図書館は人文科学分野の研究者にとっての 'laboratory' (実験室) である」と表現している。つまり、図書館ではあらゆる学問分野の他人の研究報告にアクセスできる上に、研究の出発点となる「生の資料」も提供してくれる、というのである。そして、図書は人文科学研究の基本的な道具であると述べている。

## 2. 人文科学研究の特徴からのアプローチ

### a. A. L. Schuller の説<sup>21)</sup>

Schuller によると、人文科学分野での情報の多くは

議論や解釈であり、それらを伝達するメディアの大半は図書である。

まず、Schuller は情報を発見から、単一の証拠、多数の証拠、議論および解釈、純粋理論、一般理論あるいはパラダイムへと向かう線形スペクトルとしてとらえている。そして、人文科学分野の情報のほとんどが「議論および解釈」の周辺に集まっている、としている。その理由として、

- ① 統制された実験を行うことが困難であること
- ② 作者が特定の詩や小説で伝えようとしたこと、一つの歴史的な事件が意味することなどを、論争の余地がないように確立するのは不可能であること

を挙げている。ただし、哲学については「純粋理論」に位置する、としている。

Schuller はまた、スペクトル上のそれぞれの情報がどのようなメディアで伝達されるのかについて述べている。そして、人文科学に多い「議論および解釈」や、議論や解釈のもとになる「多数の証拠」には図書を用いることが多い、としている。それは、

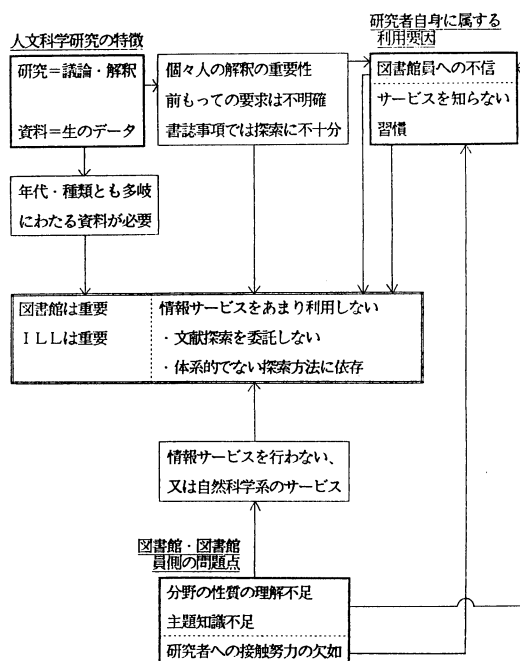
- ① 実績を残すには図書の長さが必要であることと、自分の説が何年か存続すべきであると考えていること
  - ② 大学の出版物は、印刷して10年くらい残しておくために、そういった単行書が要求されること
- といった理由からだとしている。なお、「純粋理論」に位置する哲学では、雑誌論文が多いとしている。

b. Bernhard Fabian の説<sup>23)</sup>

Fabian の論文は、人文科学にとっての理想的な図書館のあり方について、現状と人文科学研究の本質を明らかにした上で、理論的に導き出している。

論文の中で、彼は人文科学研究の方法について触れている。彼は、人文科学研究の方法は研究者の「問い」と生の資料の「答え」との間の相互作用にある、としている。彼が述べるところを要約すると、次のようになる。

まず、研究者は仮説を立てる。そして文献に当たり、テキストを集め、それらを組み合わせる。こうすることによって、研究者は仮説を裏付ける証拠を集める。文献にあたる際には、「論理」ばかりでなく「直感」も働いている。このような証拠集めの作業は、自然科学というなら実験のくりかえしである。従って、人文科学研究での文献の使い方は「実験的」である。そして、人文科学分野の研究者が求めているのは、一冊の本や幾つかの情報の断片でなく、一次資料や二次資料からなるモザ



第2図 人文科学分野の研究者の情報要求・利用についての仮説

イク状に配置されたテキストなのである。

こうした研究のあり方を念頭において、彼は人文科学における図書館の機能について言及している。人文科学における図書館と自然科学のものとの違いを、彼は次のように述べている。

関心のあるテーマの先行研究や、現在の研究の状況についての情報に通じておく必要性は自然科学も人文科学も同じである。しかし、人文科学研究は専らテキストが中心であり、テキストは研究の物的対象である。彼の見解では、自然科学における図書館は“memory”，すなわち研究の結果をためておく倉庫としての役割を果たすものである。それに対し、人文科学における図書館は、研究結果を提供すると同時に生の資料を提供するものである、としている。

3. 情報要求・利用の仮説

以上述べてきたようなことから、人文科学分野の研究者の情報要求・利用の特徴、それらの要因、および要因と要因の相互関係を整理した。そして、人文科学分野の研究者の情報要求・利用を図式で表し、これを仮説とした。それが第2図である。

研究者の情報要求・利用を決定付ける要因は、大きく



三つに分けた。第一に人文科学研究の特徴，第二に研究者自身に属する利用要因，第三に図書館・図書館員側の問題点である。おおむねこれらの要因が組み合わさることにより，研究者の情報要求・利用行動は決まるものを見て良いと思う。ただし，研究方法，研究者の置かれている状況，ならびに図書館が提供しているサービスによって，ある要因が強い影響力を持ったり，逆に影響力を弱めたりすると考えられる。

また，図式はできるだけ単純化したため，省略したものが幾つかある。補足すべき第一点は，人文科学分野における資料の機能に関する点である。第2図では，人文科学研究の特徴で「資料=生のデータ」となっている。しかし，人文科学においても自然科学と同様，研究結果を記録したもとの資料は存在する。図では，あえて特徴的な点のみ示した。補足の第二点は，研究者側には費用の問題がある，ということである。ただし，ここでは研究者にとってのサービスの効果を問題にしたいため，図には入れなかった。第三点は，図書館側には予算・人員の問題がある，ということである。しかし，これらは別に扱われるべき問題であると考え，図の中に特に含めることはしなかった。

### III. 人文科学分野の研究者の情報要求・利用に関する調査

#### A. 調査目的

前章で導き出された人文科学分野の研究者の情報要求・利用についての仮説は，実情に即しているだろうか。実情に合ったものでなければ，研究者の情報要求・利用を端緒として情報サービスのあり方を論じることはできない。本調査の第一の目的は，先の仮説を検証することである。

さらに，研究者自身の求める情報サービス像をつかむことも，情報サービスのあり方について論じる際に有効であると考えられる。そこで，この調査では研究者のサービスに対する意見・要望を直接聞いていく。しかし，実際に出てくる意見は現行のサービスにかなり依拠したもとなる公算が大きい。そのため，単純に得られた回答をそのまま「要求されるサービス像」とは考えない。そうではなく，結果を一旦情報要求に鑑みて，要求されるサービスがいかなる情報要求に基づくのかを確かめるようにする。

#### B. 調査方法

##### 1. 方法

本調査では，情報要求・利用の特徴から深く掘り下げてその要因をも確認し，なおかつそれらの因果関係をつかむことが必要である。それには，調査票の質問に対する回答しか得られないアンケート調査よりも，対話によるやりとりができるインタビュー調査の方が適していると考ええる。このような理由から，本調査の方法としてはインタビューを採用した。

##### 2. 対象

インタビューには，慶應義塾大学に所属する研究者のうち7名に協力を依頼した。調査に応じて頂いた研究者は，主題領域ごとに哲学1名，美術1名，歴史・考古学2名，文学3名であった。

インタビューは密度が濃く，時間がかかるものであった。そのため研究者の協力が得られにくいといった事情があり，調査数は限られた。また，協力して頂ける研究者を優先して調査を行ったため，主題領域をまんべんなくすることはできなかった。しかし，同じ文学の中でも研究者によってそれぞれ異なる種類の研究をしていることから，この点はそれほど大きな問題ではないと思う。

一大学のみを対象としたのは次の理由による。前にも述べたように，図書館が提供するサービスによって，研究者の図書館への要求は変わると考えられる。従って，多くの大学の研究者に調査を行うと結果に混乱が生じ，分析しにくくなる。それよりは，一大学（即ち一図書館）を対象を絞り，そこで受けるサービス状況を考慮しつつ結果を分析していく方が得策である，と考えた。

##### 3. 調査項目

調査目的の一つ，人文科学分野の研究者の情報要求・利用の仮説の検証は，次の順序で行う。

- 1) 先行研究で挙げられた，研究者の情報要求・利用の特徴を確認する。
- 2) 1) で確認した項目について，なぜそうなるのかを明らかにしていく。
- 3) 2) で得られた結果が仮説に一致するかどうか検討する。
- 4) 結果全体を見て，仮説を修正すべきかどうか判断する。

一方，研究者が求める情報サービスの把握は次の観点から行う。

- 1) 研究者の考えるサービスはどのようなものか。

## 大学図書館における人文科学分野の研究者を対象とした情報サービスの可能性

- 2) 現行のサービスに問題点は存在するか。それはどのようなものか。
- 3) 情報サービスへの要求の程度。
- 4) 自然科学分野で行われているサービス (SDI サービスなど) についての意見。

その他、資料の利用やサービスの要求は、研究対象としての資料 (たとえば文学作品) と研究結果としての資料 (たとえば研究論文) とでは異なるのではないかと考えられる。さらに、研究段階によって情報要求が異なってくることも推測される。そこで、これらの点についても確認する。

以上述べた点を考慮し、調査項目は次のように設定した。

- 1) 研究対象としての資料と研究結果としての資料の区別について  
区別があれば、以下の質問はそれぞれの資料に分けて聞く。
- 2) 用いる資料について
  - ・資料はよく使うか。
  - ・使う資料のタイプ/年代/分野/言語はどのようなものがあるか。よく使うものはどれか。
  - ・研究のプロセスに決まったパターンはあるか。研究の段階によって使う資料に差異があるか。
- 3) 資料の探索について
  - ・遡及探索、カレント・アウェアネスをそれぞれ行っているか。
  - ・どのような手段に依存しているか。
- 4) 資料の入手について
  - ・購入する資料はどのようなものか。
  - ・購入しない資料はどのようなものか。どこから入手するか。
  - ・購入するものとししないものとの関係はどうなっているか。
- 5) 資料の探索・入手の委託について
  - ・探索や入手は第三者に委託できるか。
  - ・探索や入手に費やせる時間は十分にあるか。
- 6) 大学図書館が提供しているサービスについて  
研究者にとっての情報サービスの位置づけを知るため、図書館サービス全体について聞くようにする。
  - ・満足な点/不満な点
- 7) 大学図書館に提供してもらいたいサービスについて  
先の質問と同様、図書館サービス全体について聞く。

- ・要望
- ・自然科学系のサービスについての意見

以上の質問の回答については、それぞれ理由を聞くようにした。

### C. 調査結果

#### 1. 情報要求・利用の仮説の検証

##### a. 結果

人文科学分野の研究者の情報要求・利用に関する調査結果は、第1表に倣ってまとめてみた (第2表)。ただし、「a. 研究の進め方」のうち、「研究方法は多様である」という項目については除外した。これは個々の研究者についてでなく、人文科学分野全体について述べたことだからである。

表中の空欄になっているところは、はっきりした回答が得られなかったものである。調査は時間が限られていたため、仮説にかかわる重要な部分と思われることを優先して聞いた。そのため、項目の中には空欄の多いものがある。

全体を大まかに見ると、多少個人差はあるものの、ほぼ一貫した傾向を見せているように思う。以下、図書館サービスの利用、研究で用いる資料、研究の方法・特徴、研究者、図書館・図書館員のそれぞれについて結果を細かく見ていくことにする。

(1) 図書館サービスの利用——資料探索段階においてまず、文献探索の委託については消極的な姿勢が多く見受けられた。探索を委託しがらない理由は次のようにまとめられる。

- a) 個人の性格や嗜好。そのようなサービスが良いか悪いかは分からないが、自分はなんとなく抵抗を感じる、好きではない、といったような、サービスの効果への期待とは別の感情要因による理由。
- b) 専門知識を持った図書館員がいないこと。(逆に知識のある図書館員がいれば、任せても良い、という意見もあった。)
- c) 文献探索と研究それ自体を切り離すことが難しい。
- d) 主題を明確な言葉で表現することが難しい。これは資料の内容と、研究者の要求の両方について言える。
- e) あらかじめ要求がはっきりしているとは限らない。
- f) 同じテーマの上に立っていないながら、個々人によ

第2表 人文科学分野の研究者の情報要求・利用に関する調査結果

研究者 分野	A助教授 文学	B助教授 歴史	C教授 文学	D教授 考古	E教授 美術	F助教授 哲学	G教授 文学
<b>a. 研究の進め方</b>							
単独で研究する	× <sup>2</sup>						×
文献探索は委託しない	×	○ <sup>1</sup>	○	○	△ <sup>3</sup>	△	○
<b>b. 使う資料</b>							
資料は多種多様	○	○	○	○	○	○	○
オリジナルな資料を求める	×	○	○	○	○	×	○
雑誌より図書を使う	×		×			×	×
雑誌も重要な資料	○	○	○	○		○	○
古い資料も価値がある	○	○	○	○	○	○	○
新しい資料は重要ではない	×	×	△	×	×	×	×
<b>c. 情報を入手する場所/経路</b>							
個人の蔵書に依存		○	○	×	×	×	
図書館は重要な情報源	○	○	○	○	○	○	○
informal communication は未発達	×			×			×
<b>d. 資料の探し方</b>							
二次資料をあまり利用しない	×	△	×	×	×	○	×
巻末の参考文献リストをよく使う	○	○		○	○	○	△
書評をよく使う	×				○		
ブラウジングは必要	×	○	○	○	○	△	×
<b>e. 図書館などのサービスの利用</b>							
サービスの利用(需要)は少ない	×	×	○	○	×	△	×
最新情報サービスの需要は少ない	×	×	○		×	×	×
ILLは重要	○	○	△			○	○
図書館員を信頼していない	△	○	×	○	×	×	×
図書館員との関係が密でない	×				×		×

1: ○=左の項目を支持する

2: ×=左の項目を支持しない

3: △=左の項目を場合によっては支持する

て目指すゴールの高さが異なる。そのため研究の進め方に基準がない。このことがサービスへの期待度の人による違いをもたらす。

また、部分的には図書館員に任せるとも良いという意見もあった。任せるとも良いのは、基礎資料を網羅したい、標準的な知識を得たいという場合である。逆に任せられないのは、自分個人が必要なものや、自分でも言葉でははっきり言えず、その場で判断しなければいけないような場合であった。その他、図書館員の能力次第で、任せられるならば任せる、という意見の研究者がいた。

新着速報や、コンテンツ・シート・サービスなどの最

新情報サービスは慶應大学では行われていない。そこで、その需要があるかどうかを確かめてみた。その結果、「あるにこしたことはない」、「やってくれないよりはいい」という意見が多かった。ただし、

- コンテンツ・シート・サービスについては、目次と中味が離れている分野では、余り役に立たないか、ひどく誤解してしまう。
- 作品論や作家論といった研究は最新の研究を取り入れてどうこうという性質のものではない。
- 人のために役に立つかどうか分からない文学系で、そのようなサービスをしてくれるわけがな

## 大学図書館における人文科学分野の研究者を対象とした情報サービスの可能性

い。

という問題点も指摘された。一方、ぜひそのようなサービスをやって欲しい、という研究者も一人いた。その研究者の考えは次のようなものである。

- a) (サービスで得られた情報の) 99.9% は使えないかもしれない。しかし、むしろそういった一見テーマに関係無いような情報が研究にとっては特に重要である。テーマに関係ある情報は目的が絞られているから、新しいものを生み出していくという可能性が少ない。
- b) 人文科学分野でも誰がその資料を調べたか、ということは重要。

以上、図書館のサービスに対する意見を見てきた。では、研究者たちはどのような方法で資料を探索するのだろうか。

まず、二次資料やデータベースの利用についてであるが、一般書誌や所蔵目録の利用が多かった。その他、学会誌に収録される文献目録を利用するものとして挙げている人も何人かいた。データベースを利用する研究者は少なかった。二次資料やデータベースを利用しない場合の理由は次のとおりである。

- a) 知らない、あるいは関心がない。
- b) 二次資料やデータベースがない。特に和雑誌については最近のもの以外ない。データベースでは古いものが入力されていない。
- c) (特にデータベースの利用) に不安がある。

その他、分野ごとに、

- d) 哲学はある項目から検索する、というたぐいの研究ではない。
- e) 文学ではブラウジングが大切な方法である。二次資料やデータベースはあるにこしたことはないが、頼りすぎると研究は衰退する。

といった理由が挙げられていた。

また、先行研究では「参考文献リストから探す」、「ブラウジングは必要である」という指摘がある。調査結果を見ると、参考文献を見るという方はかなり支持されている。その理由として挙げられていたのは、

- a) いろいろな評価がついている。
- b) 比較的短時間に、狭い主題に関しての全般的な見通しが得られる。
- c) 特に多く使われている文献が分かってくる。すると、研究動向や数あるものの中でどの版が良いか分かる。

というものであった。

一方、ブラウジングについては若干行わないとする研究者がいた。これは、専門分野の蔵書の内容が頭に入っているため必要ない、というのが主な理由である。そのため、専門以外のことをやる、あるいは問題の領域が非常に広い場合には効果がある、としている。ブラウジングを行う方の理由としては、

- a) タイトルでは予想もしなかった内容の論文・項目がその本に入っていることを見付けられる。
- b) 文学研究では前後の文脈が大切。従って余計なものを見ることが必要である。

などが挙げられていた。

その他、情報を得る手段として用いられていたもので多かったのは、

- a) 他の研究者に手紙などで問い合わせる。研究者の間のネットワークで、論文の抜き刷りを送ってもらう。
- b) 学会の口頭発表や、学会誌から情報を得る。
- c) 書店のカタログやアナウンスメントから得る。書店で見る。

といったものであった。特に研究にプライオリティーのある分野では、インフォーマル・コミュニケーションが行われているようであった。そのほかに、事典で項目を引き、その出典から調べていくという方法や、書評を集める、入門書にあたる、など個人々の発想や工夫による方法も幾つか挙げられていた。

(2) 図書館サービスの利用——資料入手段階において全員が、資料入手に当たり図書館に依存していることが明らかになった。これもほとんどが、自分の手元に資料を集めようと思っても、経済上の都合とスペースの制約でそうすることができない、という理由による。その結果、

- a) 公共的な機関で使えるものはほとんど購入しない。資料は図書館や公共的なもののどこかに行けば見られる、という状態になってさえいれば良い。と考えるようになっていく。そして、自分の手元に置くものについては、個人で基準は異なるものの、厳選するという態度をとっている人が多い。ただし、
- b) 図書館が本当にきちんとしたサービスをして、欲しい資料が欲しい時にあれば自分の本を寄贈しても良い。しかし、現実にはそうなっていないので、手元に置くようになってしまう。

というように、資料が必ずしもすぐに図書館で使えると

は限らない点を指摘して、逆の態度を示した研究者もいた。その他、

- c) 自分のコレクションが8割で残りを他から補う、というのが理想だが、(入手が困難なために)実際には5割に満たない。

というように、入手の困難さを理由として述べた研究者がいた。他の研究者からは、美術のカタログやマイクロフィルムの資料の中には、個人ではだめでも図書館を通じてなら入手できるものがある、という話があった。

資料の入手には、閲覧・貸出のほかに、ILLを利用するという方法がある。慶應義塾大学三田情報センターでは、国内外での雑誌のコピーのやりとりと、国立国会図書館および早稲田大学との図書貸借のサービスを行っている<sup>23)</sup>。研究者たちは、このサービスをかなり重要視しているようである。その理由は二つある。一つはサービスの便利さであり、もう一つは、「蔵書には限界があるので、分担収集とILLを組み合わせて問題の解決策とする」というものであった。ただしそれとは別に、私立大学では「資料=私学の財産」であることを指摘し、現物のやりとりは難しいということを述べた研究者もいた。

### (3) 研究で用いる資料

研究で用いる資料については、雑誌をかなりよく使うこと、新しい資料も重要であることを除けば、ほとんど先行研究結果に沿った形になった。しかし、資料にはおおざっぱに分けて、研究対象としての資料と研究結果を記した資料とがあることが、ほぼ全員の研究者に認められた。ある研究者は、「資料を読むということは、単に雑誌論文を『読む』ということと、具体的に資料を『扱う』ことの二つの面がある。資料を扱っていくことは、ラボラトリーで実験することと似ている」と述べている。そしてさらに、それぞれの資料の内容には差があることが分かった。そこで、まず研究対象としての資料と研究結果としての資料の二つに分けて結果を見ていくことにする。

研究対象としての資料にはどのようなものがあるかは、研究内容によって異なる。哲学を例にとると、

- 1) 古典的な哲学の研究の場合…プラトンやアリストテレスが書いたもの。一般的に史料と呼ばれるものを文献資料として扱うことがある。
- 2) 哲学史の研究の場合…哲学者の著した文献。
- 3) 現代の哲学の研究の場合…対象分野の知識。たとえば、物理学を対象とした哲学ならば、物理学のテ

キストや実験のデータ。

となる。しかし一般的に言って、研究対象となる資料の範囲は、タイプ/年代/言語/分野において、非常に広いことが分かった。

研究対象としての資料については、オリジナルな資料・原資料というものが重視される傾向があった。それは、「紙のどこが破けているか、紙は何色か、どんな質かということも重要」という言葉に代表されるように、内容だけでなく資料そのものがデータを提供する、といった理由による。こうした傾向は、歴史(考古学・美術史も含む)研究や、書誌学的研究など実証的な研究に携わる人に多かった。逆に、文学作品論や哲学など、書かれている内容を問題とする研究に携わる人は、原資料にこだわっていないようだった。

一方、研究結果としての資料は研究論文(雑誌論文・学位論文など)や研究書が一般的なメディアであった。雑誌論文の方をよく用いる、という研究者がかなりいたことは、先行研究結果とは異なる点である。これは、

- a) 広く行われていない研究であるため、研究書としてまとまっているものが少ない。
- b) 論文の方がそのテーマについて極端なことを言っているので、説としておもしろい。

というのが主な理由であった。このように、研究結果としての資料は、研究対象としての資料よりタイプが限られている。年代も、研究対象としての資料が原始や古代から、という場合があるのに比べると、新しいものに限定される。分野も専門分野のものにほぼ限られる。

以上、資料を大きく二つに分けて結果を見てきた。ただし、これは使う目的によって分けたものであり、最初から資料が二つに分けられるとは限らない。初めは研究結果として用いていた資料が、時がたつと研究対象としての資料になる、ということを述べた研究者もいた。また、オリジナルな資料と研究論文との間に、研究結果と研究対象の両方の性格を有した資料のレベルがあることも指摘された。

もう一つ、この調査でも人文科学分野の研究者は古い資料を重視する傾向がある、ということが明らかになった。この理由としては、

- a) 資料自身に意味がある研究領域では、その資料だけでそれは時間を超えて意味をもつ。
- b) 自然科学と違うのは、「新しいほど正しい」というものではない、ということである。そのため、昔の人の考え方と、新しい人の問題の切り口の両方を

知らなければならない。

といったことが挙がっていた。前者は研究対象としての資料という観点から述べたものであり、後者は研究結果としての資料について述べたものである。また、反対に最新情報に関して哲学研究者は、「科学はよりスピーディにやらなければならない。一方、哲学はもう一歩退いて、半年遅れても良い。それくらいだった方が、むしろ落ち着いた情報、つまり皆が吟味した後の情報が得られ、助けになる」、ということを書いていた。

その他、方法論的な模索をするために、テーマも何も無い時に思想書や哲学書などを読む、という研究者もいた。

#### (4) 研究の方法・特徴

研究方法についてたずねた結果多かったのは、「研究に一定の方式はなく、研究段階ごとに集める資料の種類は一概には言えない」というものであった。何人かの研究者は、

- a) 潜在的な興味の本を買う時やそろえる時に反映している。その結果、集めているうちにある系統のものが集まっている。その中から、あるものが研究テーマにつながったり、テーマを思い付くきっかけとなったりする。

としていた。このように、まずテーマを決め、それに關する文献リストを作り、論文を書くという「システムティックな方法」は採られていないことが分かった。それと、特別な研究テーマがなくても普段から資料を操作する、という態度が見受けられた。

また、テーマの決め方については、ある文学研究者が「自分の意見を言えば良いのだから、他の誰が言っていたって良い」と述べている。さらに、もう一人の文学研究者は、「文学研究では、同じテーマの上に立っていないながら、個々人によって目指すゴールが異なる。そのため研究の進め方には基準がない」と言っている。このように、研究は個々人の考え方を提示するものとしての性格が強く、明確な基準は存在しないようである。

例外は、クリティカル・エディション（幾つかの原資料を比較・検討し、編集するというもの）を行っている研究者である。この場合は比較的研究方法もはっきりしており、段階ごとに資料の種類も変わっていくようだった。しかも、研究にプライオリティーが存在することが分かった。

一般的に、研究の上で資料が重要な役割を果たしていると言えそうである。たとえば、

- a) 資料を見ていくうちにある考えを固める。
- b) 実証的な研究では「裏をとる」という仕事がある。つまり、資料によってある事実や考えを確かめるということをする。

ということが挙がっていた。このことは、前にも述べたが、資料を「扱う」ことはラボラトリーで実験することと似ている、と一人の研究者が指摘したことに通じるように思われる。

#### (5) 研究者

図書館サービス利用に影響を与える要因のうち、研究者自身に属するものが幾つかあることが、今まで述べてきた結果からも認められる。それは、

- a) 性格や嗜好
- b) サービスについての知識の有無
- c) サービスに対する関心の有無

といったものであった。研究者のうちの一人は、「一番困るのは、図書館員が一生懸命サービスをしたいと思っている時に、利用者側がサービスのレベルに達していないことである。図書館員の質を向上させるためにも、利用者が十分利用方法を知りつくして、レベルの高い要求を出すべきである」と述べ、逆に利用者側からの積極的なアプローチを説いている。

その他、「人文科学はすぐに人の役に立つような学問ではない。だから、人文科学分野で、自然科学分野でのようなきめ細かいサービスをしてくれる訳がない」という認識が何人かの研究者にあった。このことが、研究者が図書館に強い要求を出さない要因になっているとも考えられる。

サービスの利用とは別に、研究者には情報探索を行う上での問題点がある。それは、情報探索にはかなり時間を費やす、ということである。この点は、ほとんどの研究者に認められた。それでも、一人の研究者は「研究に見合った時間かといえば不十分」としている。このことから、情報探索には時間的な負担がかなりあると考えられる。

#### (6) 図書館・図書館員

研究者の話の中から、サービスの遂行にあたって図書館側にも問題点のあることが指摘されている。それは、次のようなことである。

- a) 専門分野の知識の欠如。ただし、分野によっては主題専門知識をもった図書館員がいることもある。
- b) 分野の特徴の理解不足によると思われる保存・配架・廃棄・欠本に対する配慮不足など。特に古い年

代の資料について見られる。

c) 適切な二次資料やデータベースがない。特にデータベースには古いものが検索できない、という問題がある。

d) サービスを行おうとしない。

最後の項目については二つの見解があった。一つは、最初からきちんとしたサービスを考えるあまりに、それが実際役に立つのかどうかという疑問が先行したり、現実にまだ実行できないためにやらない、というものである。もう一つは、自然科学とは違ってすぐに役に立つとは限らない人文科学の分野では、サービスを行ってくれるはずがない、という見解であった。

#### b. 考察

人文科学分野の研究者の情報要求・利用の仮説で検証すべき点に、図書館が提供するサービスの利用に影響を与える要因と、それらの因果関係がある。この点については、ほぼ仮説の通りにたどられたと見て良いと思う。ただし、幾つか修正・追加すべき点もある。

修正すべき第一点は、「研究者自身に属する利用要因」についてである。この調査結果では、研究者の「性格・嗜好」が利用に影響を与えることが明らかになった。これは、たとえサービスが有効なものであっても即それが利用に結びつかない場合もあることを示し、人文科学分野の研究が明確な基準を持たず、比較的自由に個人人のやり方に任されているということの現れと考えられる。従って、この点は人文科学分野に特徴的なものとして、改めて追加する必要があると思う。また当初の仮説では、要因として「習慣」を挙げていた。しかし、この点は調査では確認できなかった。むしろ習慣があるにしても、新しいサービスを利用したいと思えば、習慣を捨てることも有り得ると考えられる。また、習慣ができあがるには、その人の性格や学問の特徴がからんでいると思われる。そこで、「習慣」は仮説から削除しても良いと考える。

研究者側の利用要因にはもう一つ、「人文科学分野でサービスを行ってくれる訳がない」という認識がある。あえて仮説の図式に加えることはしないが、このことがサービスへの期待の度合いに影響を与え得るということも、注意すべき点であると思われる。

「人文科学分野の研究の特徴」についても追加すべき点がある。それは、「主題を明確な言葉で表現することが難しい」という点である。このことが、「書誌事項は情報として不十分」とあるとか、「前もっての要求は不

明確」であるということに多分につながっていると考えられる。また、テーマ資料といった方法をとるとは限らず、資料から何らかの考えが浮かんでくる場合もある、ということも挙げられる。その結果、研究のプロセスは一定していない。これは「資料=生のデータ」の側面としてとらえておきたいと思う。

「図書館・図書館員側の問題点」については、「接触努力の欠如」という点が確認できなかった。しかし、研究者側のサービスの利用要因にある、「サービスについての知識の欠如」や「サービスに対する無関心」は、もっと図書館側から研究者へのアプローチがあれば幾分解消できると考えられる。そのため、両者は関連するものとして、仮説には留めておくことにする。

サービスの利用に対する態度には個人差が見られた。仮説通りの結果にならないものの中には、仮説とは反対のパターンを示すものがあった。たとえば、

a) 図書館員の能力を信頼する場合には、比較的文献探索を委託する傾向がある。

b) 前もっての要求がはっきりしており、書誌事項で十分探索できる場合には、書誌を使う。

などである。このことから、最も利用に影響を与えている要因が変われば、利用における態度も変化する、ということが言えると思う。その他に個人差の原因として考えられるのは、研究者の「性格・嗜好」である。しかし、先にも述べたように、この点を仮説に加えることによって、このことについても「要因の変化によって利用態度も変化する」ということがあてはまると思われる。

以上の結果、仮説の一部を第3図のように修正した。

## 2. 研究者が要求するサービス

### a. 結果

#### (1) 図書館が提供するサービス全体について

研究者から出された、サービスについての要求の内訳を示したのが、第4図である。見て分かるように、蔵書に関連したものが要求の過半数を占め、次いで資料入手段階でのサービスについてのものとなっている。情報サービス関係は、全体の7.3%である。

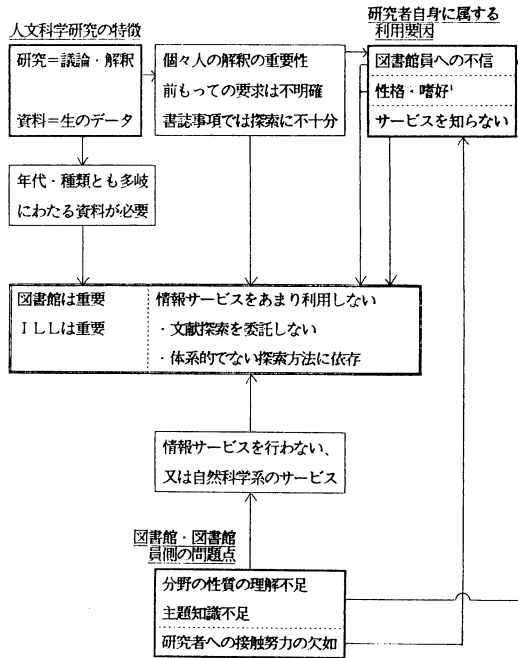
要求が出される背景には、現行のサービスにおける問題点があった。それら問題点を解消して欲しい、という意識からサービスへの要求を出してくるケースが多かった。

#### (2) 情報サービスについて

情報サービスに関する要求に絞って見たところ、次の三例が一人の研究者によって挙げられていた。

大学図書館における人文科学分野の研究者を対象とした情報サービスの可能性

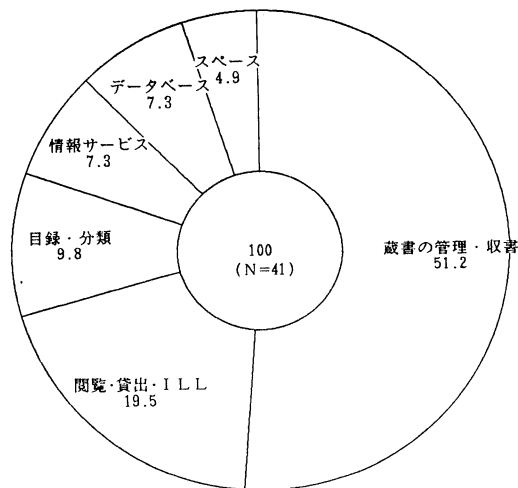
- 1) 新規受け入れ資料の定期的通知
- 2) 新しい雑誌論文のリストの配布 (毎日)
- 3) 目次のコピーの定期的配布



第3図 人文科学分野の研究者の情報要求・利用について修正された図式

1: 新たに図式に加えた部分

(単位: %)



第4図 研究者による図書館への要求のサービス内容別内訳

調査では、逆にこちら側からコンテンツ・シート・サービスや SDI サービスなどの、自然科学系のサービスについて説明し、意見を求めてみた。その結果については、先に仮説の検証のところでも述べた。それによると、多少の問題点の指摘はあったが、「サービスがあるにこしたことはない」、「やらないよりはやってくれたほうが良い」という意見が多かった。

具体的なサービスの要求の他に、情報サービスに対する考えも幾つか述べられている。情報サービスの要求を出していた研究者は、次のようなことを言っている。

- 1) スタートとして基本的なところだけあらくおさえられると良い。後はそれから先のところまで図書館がやる必要はない。図書館がやる場所の限界あるいは役割をはっきりさせた方が良い。
- 2) 自然科学系と同じことを割り切ってやった方が良くもしいない。人文科学も自然科学も本質的にはあまり変わらない。(速報性、プライオリティーに関しては) 人文科学でも誰が最初に資料を調べたかということは重要である。
- 3) 将来的には使えなくなるという議論が出てくるかもしれないが、それはその時考えれば良い。さしあたって使えるのだから、そういうできるところから始めて欲しい。
- 4) 99.9%は使えないかもしれないが、一見テーマに関係無いような情報が研究にとっては重要である。
- 5) サービスを利用しないからといって、必要がないという訳ではない。一年に一度だけ使うようなサービスをしているということは、一年に一度は利用する、ということである。

他の研究者の考えも見てみると、1) で述べられている「限界あるいは役割」としては、

- a) 図書館にはコンピュータによるデータベースやシステムを作ってもらい、検索は自分で行う。
- b) (文献探索において)「お手伝い」してくれる図書館員、あるいは「アドバイザー」としての図書館員がいればそれにこしたことはない。
- c) 標準的な知識を網羅したい場合は図書館員に探索してもらおう方が良い、その場での判断が必要なもの、専門的に掘りこんでいく分野は自分でやる。

という三つのタイプが認められた。2) で述べている速報性に関しては、「最新の情報を特に気にしない」としている分野もある。また、4) については、逆に「捨てていく量を見ると、労力の無駄を感じる」と述べていた



研究者もいた。

ところで、具体的な要求に結び付かなくても、資料や情報の探索には問題点があることが分かった。たとえば仮説を検証する際明らかになったように、

- a) 二次資料やデータベースがない。
- b) 二次資料やデータベースを知らない。
- c) 探索に多大な時間を費やす。

といった点がある。その他、

- d) (カレント・アウェアネスにおいては)今の方法でもれがかなりあるのではないか、という不安がある。
- e) 文献探索がうまくできないために止まってしまう研究はたくさんある。

という話も聞かれた。

#### b. 考察

調査結果での要求の内訳を見ると、情報サービスへの要求はそれほど高くないように思われる。しかし、これは要求そのものが少ないのではなく、求める資料が入手できるか否かということの方が、研究者にとって切実な問題であるため、と解釈したい。すでに検証されたように、研究者は資料によってある事実や考えを確かめる。その資料の入手においては図書館にかなり依存している。そのため、「身近に良い図書館があるとないによって、彼の研究者としての運命が決まる」<sup>24)</sup>ほど、図書館の資料提供機能の果たす役割は大きい。その結果、研究者の関心はまず資料の入手段階でのサービスに向けられがちで、情報サービスまで思い及ばない。以上のように考えられる。

必ずしも情報サービスへの要求がないわけではないと思われる理由としては、

- 1) わずかではあるが、研究者側から情報サービスへの要求が出ている。
- 2) 自然科学系のサービスを適用することに対して肯定的な意見が多かった。
- 3) 情報サービスは行っていない、あるいはサービスを利用していないといった現状に問題がある。

といったことが挙げられる。ただし、自然科学分野におけるほど要求が切迫しているという印象は、全体的にあまり感じられなかった。また、図書館側の果たす役割を限定した形でのサービスが望まれている、ということが言えると思う。

## IV. 人文科学分野の研究者に対する情報サービスの可能性

III章では、調査の結果から人文科学研究者の情報要求・利用と、要求するサービスについての考察を行った。その結果、研究者の情報サービスへの要求はある、と認められた。ただし、要求は切迫したものではなく、図書館側の役割を限定する傾向があった。また、幾つかの要因によって情報サービスの利用における態度が消極的になる、ということも明らかになった。要するに、情報サービスへの要求は基本的にはあるのだが、幾つかの要因によってそれが利用に結び付かない、ということが言える。

考察では同時に、利用を阻害している要因が変わるとサービスを利用する方向に態度も変化することが分かった。従って、効果的な情報サービスを可能にするには要求を利用に結び付けなければならないが、それにはまず、サービスの利用を阻害する要因を変えていけば良いと考えられる。

しかしながら、要因には変えることのできるものと変えることのできないものがあるように思われる。まず、基本的に変化させられる要因には、「図書館・図書館員側の問題点」に属するものがある。「分野の性質の理解不足」や、研究者に対する「接触努力の欠如」は図書館員自身の努力次第で変えることができるように思う。また、研究者との接触を密にすることで、研究者のサービスに関する知識や関心を高めることもできる、と考えられる。

ところで、図書館員の「主題知識の不足」および研究者の「図書館員に対する信頼の欠如」は、研究者が専門としていない分野と専門分野では身につけるべき知識のレベルが異なってくると思われる。そのため、一概に変化させられるとは言えない。同じように、研究者の信頼も専門分野と非専門分野とは違ってこよう。この二つに関しては、「ある程度まで」ならば努力によって変えることができると考えられる。

サービスを行う上で、図書館としては少なくとも以上のことを行っておく必要があると思われる。

一方、変えることができない要因も幾つかある。このような要因の一つに、研究者の「性格・嗜好」がある。これに対しては、有効なサービスを提供して、研究者に納得してもらえるようにしていくしかないと思われる。そしてもう一つ、「人文科学研究の特徴」も変えること

ができない要因である。これについては、サービスの方が人文科学研究に適したものにしていけるべきであると考えられる。研究に適したサービスであれば、研究者の嗜好にも合いやすいものになると思われる。従って、これらの要因による利用の阻害の解決には、人文科学研究に適切なサービスのあり方を検討することが求められる。

ところで、「人文科学研究に適切な情報サービス」のあり方を考える際に、考慮すべき点がある。それは、要求される情報には人文科学研究の特徴が強く反映されているものとあまり反映されていないものがある、ということである。研究者の意見では

1) 基本的な知識を得たい場合に必要な情報

2) 研究者が深く掘り下げていく場合に必要な情報

の二種類に分けてサービスの利用について述べたものが多かった。そこで、以下それぞれについて検討を進めていくことにする。

1) については、「人文科学分野の研究の特徴」が与える影響はあまり強くないと思われる。第一に、「基本的な知識」ということから、資料そのものよりは書かれている内容が求められている。つまり、資料をデータとして見なしてはいない。そのため、研究者自身の解釈はそれほど行われないと考えられる。また、この場合「網羅的」探索を求めることが多い。従って、選択に重点はあまり置かれず、ゆえにあらかじめ要求を明確に絞りこむ必要性も少ないと考えられる。さらに、この種類の情報要求は研究者の専門分野でないことが多い。そのため、図書館員がある程度の主題知識を持っていれば、研究者は自分より図書館員の方を信頼すると思われる。

以上のことから、この種類の情報についてはサービスを行うことは比較的容易であると考えられる。たとえば、データベースや書誌を駆使して網羅的な検索を行うことは、有効なサービスになりうると思う。カレント・アウェアネスの点でも、コンテンツ・シート・サービスや SDI サービスは可能だと思われる。ただしコンテンツシート・サービスは、目次に示されている論題と論文の内容がかけはなれている分野では、内容別に簡単な分類を施したリストに直すなどの工夫が必要になるかもしれない。SDI サービスは、研究者が要求した範囲で情報を選択するとしても、あまり限定し過ぎないようにする方が望ましいと思われる。もっと簡単なサービスでは、図書館資料の新着速報サービスがある。これも、図書館資料に関しては「網羅的」である、という点で行ってみる価値はあろう。

もし研究者の専門分野でこのような情報要求があるとなれば、サービスは可能であろうか。非専門分野とは違い、この場合は研究者の主題知識の方が勝っている。しかし、求めているのは「基本的な知識」であるため、高度な知識を持たなくても間に合うと思われる。従って、サービスを行う余地はあると考える。しかしながら、研究者がその専門分野で「基本的な知識を得たい」というのは、カレントな情報を求めている場合に限られるだろう。なぜなら、それまでにある知識は、研究者である以上既に把握していると思われるからである。そこで、この場合はカレント・アウェアネス・サービスに限ってならばサービスは可能である、と考えられる。

次に、2) の場合について考えてみる。これは、「深く掘り下げていく」とあるように、研究の核心に触れる部分と密接にかかわっている。従って、「人文科学分野の研究の特徴」が強い影響を及ぼすと考えられる。すなわち、資料がデータとして扱われる場合が多く、従って研究者自身の解釈に負うところが大きい。また、具体的なデータを求めるため、要求はかなり選択的になるように思われる。そして、求めるデータがどの資料にあるか知っている場合と知らない場合とでは、探索方法に相当の違いが生まれると考えられる。知っている場合は最初から具体的な資料に絞ることができ、探索の必要はない。逆に知らない場合、書誌事項だけで探索することは非常に難しいと思われる。さらに、このような研究の核心に触れる情報要求には、研究者に匹敵するだけの主題知識が必要になると考えられる。

これらのことから考えて、この種の情報要求に対してきちんとしたサービスを行うことは難しいと思う。きちんとしたサービスではなく、研究者に探索の出発点を与える、という意味では 1) で述べたようなサービスを行う価値はあると思う。つまり、図書館としては研究者が探索のきっかけをつかめるところまでをサービスとして行い、そこから先は研究者自身で行う、という役割分担の発想である。1) で述べたサービスのほか、書誌やデータベースの作成・提供なども、きっかけとしては有効であると思う。このように図書館の役割を限定して考えれば、遂行が可能なサービスの範囲は広がると思われる。

もし、あくまでも最終的に研究者の情報要求を満たし得るサービスを行おうとすれば、最低研究者並の高度な主題知識を持つことが不可欠である。それだけではなく、研究者の要求を理解するためには、研究者が「どのようなデータを必要としているのか」を推測する能力が

求められると思われる。それには、研究者一人一人に専任の図書館員がつき、図書館員は研究者が行っている研究の内容や目的、進捗を十分に把握することが必要になると考えられる。しかしながら、現実にはここまで徹底したサービスを行うことは非常に難しい。一歩進んだレファレンス・サービスとして、数名の、専門主題によく通じた図書館員によるカウンセリングなどが、多少有効な方法として考えられよう。

さらに、資料から求められるデータは、本の形であったり、文章の中の数行であったり、図や写真であったりする。このように多様な要求には、キーワードによるアクセスでは対応できないと思われる。図書館員が探索するにしろ、研究者自身が探索するにしろ、様々な探索方法（たとえば、絵画をモチーフから検索できるような方法）を考案する必要があると考えられる。

以上、要求される情報を二種類に分けて検討してきた。その結果、それぞれのサービスのあり方にはかなり差があると考えられた。従って、人文科学分野で情報サービスを行う際には、まず二種類の情報の区別を付けなければならないと思われる。そして、とりわけ研究の核心に触れるような場合に必要とされる情報を扱うサービスは、自然科学系のサービスよりも、かなり複雑な技術と高度な能力が必要になることが避けられないと考えられる。全体として、人文科学分野でも情報サービスは可能と思われるが、自然科学分野のように単純なものでは不十分であろう、というのが最終的な結論である。

本稿で述べた情報サービスの可能性は、あくまで研究者の情報要求と利用との関連からとらえたものであった。そのため、サービスの具体的な方法についてはまだ検討を行う余地を残している。また、本稿では人文科学分野全体を一括して扱った。しかし、実証的な研究を行っている場合と、そうでない場合とでは、実際の要求の現れ方が違ってくるということがある。今後サービスの具体的な方法を検討する際には、この点についても留意する必要があると思われる。

なお、本稿作成にあたり、慶應義塾大学文学部図書館・情報学科の上田修一教授には終始ご指導をいただいた。そして、同大学大学院文学研究科の武者小路澄子氏には調査にあたりご助言を賜った。これらの方々には深く感謝の意を表す。また、調査に協力して下さった慶應義塾大学文学部の先生方には、ご多忙中のところ貴重な時間を割いて頂いた。この場を借りて、厚く御礼申し上げます。

- 1) 岡澤和世. 人文科学者の情報の要求と利用: 人文科学分野対象の調査のレビューを中心に. *Library and Information Science*. No. 21, p. 29-48 (1983)
- 2) 井出 翁, 小田光宏. "8.4.5 情報サービス". 図書館情報学ハンドブック. 図書館情報学ハンドブック編集委員会編. 東京, 丸善, 1988, p. 768-771.
- 3) Mikhailov, A. I.; Cherny, A. I.; Giliarevskii, R. S. "7. The scientific information activity". *Scientific Communications and Informatics*. Burger, Robert H. transl. Arlington, Va., Information Resources Press, 1984, p. 225-263.
- 4) 長澤雅男. 近代図書館におけるレファレンス機能. *Library and Information Science*. No. 2, p. 173-187 (1964)
- 5) 長澤雅男. 大学図書館近代化の機軸としてのレファレンス・ワーク. *Library and Information Science*. No. 3, p. 267-279 (1965)
- 6) Stone, Sue. Humanities scholars: information needs and uses. *Journal of Documentation*. Vol. 38, No. 4, p. 292-313 (1982)
- 7) 昭和58年度図書館統計: 10年間を振り返って. つくばね. Vol. 10, No. 1, p. 3-11 (1984)
- 8) 以下) 9)~12) の文献は, 1) の岡澤の論文に拠るものである。
- 9) Jones, C.; Chapman, M.; Carr Woods, P. The characteristics of the literature used by historians. *Journal of Librarianship*. Vol. 4, No. 3, p. 137-156 (1972)
- 10) Bebout, L.; Davis, D., Jr.; Oehlerts, D. User studies in the humanities: a survey and a proposal. *RQ*. Vol. 15, No. 1, p. 40-44 (1975)
- 11) Stieg, Margaret F. The information needs of historians. *College and Research Libraries*. Vol. 42, No. 6, p. 549-560 (1981)
- 12) Stone, Sue., ed. *Humanities Information Research: Proceedings of a Seminar*, Sheffield, 1980. Sheffield, Centre for Research on User Studies, University of Sheffield, 1980, 96 p. (CRUS Occasional Paper, No. 4) (BLR & DD Report, No. 5588)
- 13) Stone, Sue. A Review of User Related Research in Humanities Information. Sheffield, England, Consultancy and Research Unit Department of Information Studies, University of Sheffield, 1985, 51 p. (CRUS Working Paper, No. 1)
- 14) Méndez, A. An analysis of humanists' requests received by an information service for the humanities. *Journal of Information Science*. Vol. 9, No. 3, p. 97-105 (1984)
- 15) Guest, S. S. The use of bibliographic tools by humanities faculty at the State University of New York at Albany. *The Reference Librarian*.

大学図書館における人文科学分野の研究者を対象とした情報サービスの可能性

- an. No. 18, p. 157-172 (1987)
- 16) 原文献である学位論文は入手できなかった。そのため、以下に示す原文献の要約を参照した。Hopkins, Richard L. Dissertation summary: the information seeking behaviour of literary scholars. *Canadian Library Journal*. Vol. 46, No. 2, p. 113-115 (1989)
- 17) 杉村 優, 佐藤隆司. 人文・社会科学学術情報の利用実態に関する比較研究: 情報利用研究の展開のための予備的考察. *図書館短期大学紀要*. No. 5, p. 1-31 (1971)
- 18) 桜井宣隆, 佐藤隆司. 学術情報の利用実態に関する比較研究: 情報利用研究のための予備的考察 (2). *図書館短期大学紀要*. No. 7, p. 99-139 (1973)
- 19) 田中英夫. 特集: 学術情報と大学図書館, 利用者の文献探索法: 一歴史研究者の「覚書」的小論考をめぐって. *大学図書館研究*. No. 10, p. 52-57 (1977)
- 20) 糸賀雅児. “図書館利用者調査の方法と問題点”. *図書館利用者調査の方法と問題点*. 日本図書学会研究委員会編. 東京, 日外アソシエーツ, 1986, p. 7-44. (論集: 図書館学研究の歩み, 第6集)
- 21) Schuller, A. L. Communication in the arts and humanities. *Journal of Research Communication Studies*. No. 3, p. 47-63 (1981)
- 22) Fabian, Bernhard. Libraries and humanistic scholarship. *Journal of Librarianship*. Vol. 18, No. 2, p. 79-92 (1986)
- 23) 慶應義塾大学三田情報センターが発行している「図書館利用案内シリーズ」の No. 16 に拠った。
- 24) 中山 茂. 研究者の図書館へのうらみつらみ. *図書館の窓*. Vol. 25, No. 5, p. 51-54 (1986)